

2020. 6. 14 (日) マタイ20:29~34

20:29 さて、一行がエリコを出て行くと、大勢の群衆がイエスについて行った。

20:30 すると見よ。道端に座っていた目の見えない二人の人が、イエスが通られると聞いて、「主よ、ダビデの子よ。私たちがあわれんでください」と叫んだ。

20:31 群衆は彼らを黙らせようとたしなめたが、彼らはますます、「主よ、ダビデの子よ。私たちがあわれんでください」と叫んだ。

20:32 イエスは立ち止まり、彼らと呼んで言われた。「わたしに何をしてほしいのですか。」

20:33 彼らは言った。「主よ、目を開けていただきたいのです。」

20:34 イエスは深くあわれんで、彼らの目に触れられた。すると、すぐに彼らは見えるようになり、イエスについて行った。

<説教>

神の御子イエスが天の父なる神から遣わされてこの世に来られたのは、人から「仕えられるためではなく仕えるため」でした。(20:28)

そして十字架につけられて「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるため」でした。(同)

その十字架につけられるためにイエスは「エルサレムに上る途中」(20:17)でした。

その「エルサレムに上る途中」イエスは「エリコ」という町を通って行かれ、十二弟子たちもちろん「一行」としてイエスにつき従っていました。

20:29 さて、一行がエリコを出て行くと、大勢の群衆がイエスについて行った。

過越の祭りが近づいていて、多くの人々もまたエルサレムを目指していました。

エルサレムに近い（と言ってもまだ 20 kmほどは離れていましたが）エリコには多くの人々がいてその中から「大勢の群衆がイエスについて行った」のでした。

20:30 すると見よ。道端に座っていた目の見えない二人の人が、イエスが通られると聞いて、「主よ、ダビデの子よ。私たちがあわれんでください」と叫んだ。

「目の見えない二人の人」が「道端に座っていた」のは物乞いのためでした(マルコ 10:46、ルカ 18:35)。

エルサレムに向かう多くの人々からの施しを求めて「エリコ」の町外れにいたのでしよう。

なお、マタイでは「二人」ですが、マルコとルカでは「一人」のこととして記されています。

特にマルコは「ティマイの子のバルティマイ」と名指ししています。

マルコとルカは何らかの理由で二人のうちの一に焦点をしばって書いたのでしよう。

さて「目の見えない二人の人」はおそらくイエスの評判をその耳ですでに伝え聞いていたことではよう。

そして今、そのイエスが自分たちの近くを「**通られると聞い**」たのでした。

「ナザレのイエスがおられると聞い」た（マルコ 10:47）のであり、「ナザレ人イエスがお通りになるのだ」と人々から聞いた（ルカ 18:37）のです。

しかし「**目の見えない二人の人**」がその口でイエスと呼んだ言葉は、群衆が彼らに言ったような「ナザレのイエス」ではなく、「**主よ、ダビデの子よ。**」でした。

彼らは「**大勢の群衆**」とは違って、イエスをただの人間としてではなく、「**主**」そして「**ダビデの子**」（神の約束のメシヤつまりキリスト）と信じてイエスと呼んだのです。

それは「**私たちをあわれんでください**」と、「二人が…心を一つにして」（18:19）、「**主**」であり「**ダビデの子**」であるお方にあわれみを祈り求める信仰（告白）の言葉でした。

彼らの肉の器官としての目は暗く閉じていましたが、確かに“**霊的な目**”、信仰の目は明るく開いていたのです。

そして彼らは、目は見えませんでした。耳と口を精一杯生かして用いたのでもありました。

しかしそんな彼らに対する人々の態度は冷たいものでした。

20:31 群衆は彼らを黙らせようとたしなめたが、彼らはますます、「主よ、ダビデの子よ。私たちをあわれんでください」と叫んだ。

「**たしなめた**」とは「**叱った**」（19:13）と同じ言葉です。

子どもたちをイエスのみもとに連れて来た人たちを弟子たちが叱ったあのかのときの状況と同じだとすると、「**群衆**」もこの「**目の見えない二人**」を、イエスに近づく資格のない者、イエスを煩わすだけで、イエスのあわれみや恵みを受ける資格の無い“**小さい者たち**”と見下していたこととなります。

または、彼らを特別に罪深い“**罪人**”と見下していたのかもしれませんが。

ヨハネ 9 章には目の見えない人を前にして弟子たちがイエスに「この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」（ヨハネ 9:2）と聞く場面があります。

とにかく、目も見えないようなお前たちが分かったようなことを言うな、黙っておれ、とたしなめたのでしょ。

そうやって「**群衆**」は彼らをイエスに近づけまい、イエスから引き離そうとしました。

そしてまた、「ナザレ人イエス」を「**主よ、ダビデの子よ**」と彼らと呼んでイエスをキリストと大胆に大声で言い表したので、「**群衆**」は驚き恐れて「**彼らを黙らせようとたしなめた**」とも考えられます。

なぜならそのときすでに「ユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。」（ヨハネ 9:22）からです。

ユダヤ人たち、殊にパリサイ人や律法学者たちがこれを聞きつけたら、彼らの怒りを買ひ、自分たちが目の見えない二人の仲間と見なされ、とぼちちりを受けることになる「**群衆**」は恐れられたのかもしれませんが。

そうやって「**群衆**」は彼らを自分たちにも近づけまい、自分たちから引き離そうとしたのです。

それに対して、「彼らはますます、「主よ、ダビデの子よ。私たちがあわれんでください」と叫んだ。」のでした。

これは彼らがますます群衆に対して意地になった、とか自分たちの熱心さを群衆にアピールしようとしたということではありません。

彼らは「主」「ダビデの子」なるただ一人のお方、イエスに向かって叫んだのです。

このように人々から蔑まれ、小さく見られている者たちが信仰によってご自分を正しく呼びまつり、告白するのをイエスご自身は、「黙らせようとたしなめ」ようとはなさいません。

続く 21 章でも、宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫ぶ (21:15) のを、祭司長たちや律法学者たちは腹を立てましたが、イエスはお止めにはなりませんでした。

20:32 イエスは立ち止まり、彼らを呼んで言われた。「わたしに何をしてほしいのですか。」

20:33 彼らは言った。「主よ、目を開けていただきたいのです。」

「群衆」は、このイエスを信じる小さい者たちを無視し、その叫びをかき消そうとし、イエスに近づけまい、イエスから引き離そうとしました。

しかしイエスは、このイエスを信じる小さい者たちの信仰告白に耳をとめてくださり、その祈りに応えてくださいました。

彼らはあわれみを求める自分たちの声がイエスに届けばいいと思っていたかもしれませんが。

しかしイエスは彼らを「呼」んで、ご自分のもとに招いてくださり、更には「わたしに何をしてほしいのですか」とおことばをかけてくださいました。

彼らは「主よ、目を開けていただきたいのです。」と、なおも信仰によってイエスに答えました。

ただの人に対する通常のもの乞いなら「目を開けていただきたい」などとはまず求めません (そんなことを求めても無理だとわかっていますから)。

何か欲しい物 (お金とか食べ物とか) を求めるところでしょう。

でも彼らは自分たちの目が開かれることを願いました。

それは要するに、自分の一番弱い部分、一番不足している部分、一番恥ずかしい事、一番神のあわれみを必要としている事柄を正直に主なるイエスに告白したのです。

全く弱く力のない自分に対するイエスからの一方的な「あわれみ」、恵みを乞い求めたのでした。

20:34 イエスは深くあわれんで、彼らの目に触れられた。すると、すぐに彼らは見えるようになり、イエスについて行った。

「深くあわれんで」とは、イエスが「羊飼いのいない羊の群れのように、弱り果てて倒れていた」「群衆を見て深くあわれまれた」(9:36)の「深くあわれむ」と同じであり、またあの「一万タラントの負債のある者」を「かわいそうに思って彼を赦し、負債を免除してやった」「主君」(18:27)の「かわいそうに思う」と同じ言葉です。

また有名な放蕩息子の父親が彼を見つけて「かわいそうに思」った（ルカ 15:20）のと同じです。

そういう、単なる同情以上の、内蔵が心の深みまでが突き動かされて抑えきれずにあふれ出た深いあわれみがイエスのうちにあり、イエスの方から一方的に流れ出て、二人に注がれたのです。

群衆は二人をイエスに近づく資格の無い小さい者と見なしていました。

また彼ら自身も、確かに自分たちはイエスに近づく資格はなく、ただイエスが遠くからでもせめておことばをくだされば、と思っていたかもしれません(あの百人隊長のように)。

しかし彼らを「深くあわれ」まれたイエスはその御手で「彼らの目に触れられ」ました。

彼らをすぐに「見えるように」してくださり、彼らが「イエスについて行」くようにしてくださいました。

すべてはイエスのうちにある「深いあわれみ」によること、恵みのみわざでした。

そういう深いあわれみをもってイエスはイエスを信じる小さい者たちに仕えてくださいました。

今やわたしには十字架という“大仕事”が目前に迫っているからあなたがたの面倒を見ている暇はない、とか、わたしには大勢の群衆がついて来ているからあなたがたたった二人の面倒を見ている暇はないなどとイエスは言われませんでした。

むしろ、あなたがた、目が見えず、人々から疎まれ、人々がわたしに近づけまいとしている小さな者をあわれむことこそご自分のなすべきこととしてくださったのです。

弟子たちは前に、子どもたちを小さい者、イエスに近づく資格無き者と見なして、イエスから戒められました。

また自分こそが一番大きな者、イエスに近づく資格ある偉い者とうぬぼれてイエスから戒められました。

弟子たちの見下し、うぬぼれの裏には、本当は自分のうちにこそイエスからあわれんでいただくべき弱さや罪があるのに、それらを認めず、無いかのように振る舞い、隠そうとし、人目を気にし、うわべを取り繕い、イエスにさえ自分の良いところだけを見せようとするプライドがあり、それを捨て切れなかったということでしょう。

群衆が二人を黙らせようとたしなめたのも、「あわれんでください」などイエスの前でそんな弱々しくみっともないことをおおっぴらに言うものではない、もっと気丈に立派に“信仰深く”ふるまうものだという考えが裏にあったのでしょう。

しかし、そういう考え—プライド—こそが、あわれみふかいイエスに人を近づけさせず、イエスから人も自分をも引き離すことになっていたことに気がつきませんでした。

私たちがあのような弟子たち、またあのような群衆と同じ過ちにいつも傾いている者だと言うほかありません。

ですから、私たちがイエスのもとに立ち返り、素直にそして真剣に「主よ、**ダビデの子よ。私たちがあわれんでください**」と乞い願うほかありません。

なにしろ、まず主が私たちが「**深くあわれんで**」くださっているのですから。

私たちはそういうイエスを信じる小さい者たちなのです。